

NEWSLETTER

No.21

2009年7月21日

会長 山梨正明 事務局 〒600-8268京都市下京区七条通大宮東入大工町125番地の1 龍谷大学
東森 勲 研究室内

TEL 075-343-3311 (代表) FAX 075-343-4302
psj.secretary@gmail.com

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

★ 会員の皆様、お変わりありませんか。日本語用論学会 Newsletter 第 21 号をお届けします。さる 6 月 14 日に、第 41 回運営委員会が開かれました。この号は、そこで討議された内容をもとに編集されています。

ところもあるので、お早めに予約をおすすめします

★2007(平成 19 年)度会計報告(2007 年 4 月～2008 年 3 月) (2008 年 12 月 20 日承認)

《 事務局より 》

1. 日本語用論学会の過去の大会の全プログラム、大会論文集の全目次、語用論研究の全目次をHPに近いうちに掲載します。
2. 2008年度より、会員番号を導入しています。事務局での処理、会計処理、お問い合わせの際には、この会員番号を必ずつけてお願いします。
3. 語用論研究は開拓社より、今年度会費を納入された方にのみ、お送りしています。大会論文集は、原則として、大会に参加していただいた方には大会会場でお渡しすることになっています。それ以外の方は、会計にバックナンバーとして1冊1500円の納入が必要となり、事務局より発送します。
4. 会費は（一般会員：5,000円、学生会員：4,000円、団体会員：6,000円 [平成18年3月21日運営委員会決定]）となっています。書店などは団体会員となります。
5. 2009年12月5日、6日の12回大会は京都、龍谷大学（深草キャンパス）で開催されます。松山大会と同様に多数の皆様の発表、参加をお待ちしています。なお、この時期はまだ、紅葉の最後のころで、京都市内のホテルは宿泊予約がいっぱいの

収入

前年度繰越残高

3,759,741

年会費

振込み分 (398 口)

1,916,000

一般 300 口 (@5,000)

1,500,000

学生 86 口 (@4,000)

344,000

賛助 12 口 (@6,000)

72,000

大会当日 (52 口)

236,000

一般 28 口 (@5,000)

140,000

学生 24 口 (@4,000)

96,000

学会当日会員会費

163,000

一般 14 口 (@7,000)

98,000

学生 13 口 (@5,000)

65,000

大会参加費

625,000

『語用論研究』等バックナンバー売り上げ

46,000

懇親会費

264,000

大会昼食代金

71,000

合計

7,080,741

支出	
印刷費 予稿集・語用論研究	1,099,550
郵送費	271,870
事務局諸費	1,123,901
会議費	304,541
文具	111,331
その他雑費	53,979
人件費（学生アルバイト）	654,050
研究会助成金	40,000
旅費交通費	39,500
講師謝金	740,000
懇親会・大会昼食代金	512,000
合計	3,826,821

次年度繰越金（普通預金残高）
3,253,920

＜なお、Newsletter に記載していただいた会計報告の年度が1年ずつズレていたことが判明しましたので、訂正してお詫び申し上げます。

★＜訂正前＞平成19年度（2007年度）会計報告（Newsletter No.19）——>＜訂正後＞平成18年（2006年度）会計報告

★＜訂正前＞2006（平成18）年度の会計報告（Newsletter No.17）——>＜訂正後＞2005（平成17）年度の会計報告

★＜訂正前＞2005（平成17）年度の会計報告（Newsletter No.15）——>＜訂正後＞2004（平成16）年度の会計報告

★第12回大会（於：松山大学）報告

2008年12月20・21日に松山大学で開催された大会は、山梨正明会長の下、ロンドン大学のウィルソン教授をゲストスピーカーに迎え、学会参加者約200名、懇親会参加者約100名を数え、盛会のうちに閉会した。久保

進副会長のご尽力により、松山大学から50万円、また松山観光コンベンション協会から30万円の助成金をいただきました。この場をお借りし、御礼を申し上げます。

★ 会費納入のお願い

今年度の会費をまだ納入されていない方は、事務局から送られた振込用紙で至急納入をお願いします。

★ 入退会希望、住所などの変更についてこれらについては事務局の事務局補佐（psj.assistant@gmail.com）にご連絡ください。

★ 第12回大会発表募集のお知らせ

2009年度の第12回大会は、京都の龍谷大学で、2日間開催の予定をしています。特別講演としてHorn先生とHaberland先生をお迎えすることになっています。（両氏の紹介は、本ニューズレター、11ページに。）

なお、大会のプログラムなど具体的な内容に関しては学会のHPに情報がわかりしだいご紹介しますので、ご覧ください。

■2009年12月5日（土）～6日（日）

■龍谷大学（深草キャンパス）

http://www.ryukoku.ac.jp/about/campus_traffic/traffic/t_fukakusa.html

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67
TEL:(075)642-1111 FAX:(075)642-8867

つきましては、「研究発表」、「ワークショップ」、「ポスター発表」の発表者を募集します。会員の皆さま、ふるってご応募下さい。

以下に応募要領を示します。なお、応募宛先、およびワークショップ発表の形態が、昨年度から変更されましたので、ご注意ください。

＜大会応募条件など＞

★第12回大会発表 応募締切：2009年8月20日（木） 必着

「研究発表等に応募する時は、入会登録をし、年会費を納めて会員になることが必要となります。→入会案内参照」

★応募宛先・問合せ先

山口治彦(大会運営副委員長)
メール：hikoyama@inst.kobe-cuf.s.ac.jp
郵送：神戸市外国語大学
651-2187 神戸市西区学園東町9-1
078-794-8111

(応募・問合せは、極力、メールでお願いします)

★ 発表形態

①研究発表：発表25分＋質疑応答10分

②ワークショップ：1時間40分、一定のトピックについて3名以上の団体(司会者を含む)で応募。＜ワークショップは団体発表のみに変更になりました＞

③ポスター発表：1時間40分(掲示時間)

★ 発表言語

日本語もしくは英語。応募書類に必ず明記してください。

★ 応募原稿の体裁

1ページにつき25文字x 30行で、参考文献は文字数に含めません。

研究発表：3ページ以内

ワークショップ：全体説明2ページ以内、各発表1ページ以内

ポスター発表：1ページ以内

★ 電子メールでの応募について

以下のとおり形式を統一します：

(ア)メールの件名では、「研究発表」, 「ワークショップ発表」, 「ポスター発表」の別を明記する。例：【語用論学会：研究発表(山口)】。

(イ)応募原稿は、Microsoft Wordで作成し、添付ファイルにて送る。

(ウ)応募原稿は、①「個人情報ファイル」と②「発表要旨ファイル」の二つのファイルからなる。

(エ)①のファイル名を「個人情報(X).doc」、②のファイル名を「研究/ワークショップ/ポスター発表要旨(X).doc」とする。Xの部分には(代表)応募者の姓を入れる。例：「個人情報(山口).doc」「ワークショップ発表要旨(山口).doc」

(オ)一つの応募メールにこの二つのファイルを添付する。

(カ)ワークショップの応募については、代表者が発表者の個人情報および発表要旨

をそれぞれ一つのファイルに取りまとめる。(キ)メールの本文には、添付ファイル①「個人情報ファイル」の内容と同じ個人情報を貼り付ける。

(ク)①「個人情報ファイル」は、以下の書式とする。

発表形態：(「研究発表」, 「ワークショップ発表」, 「ポスター発表」のいずれか)

題目：XXXX

発表言語：日本語/英語の別

氏名：XX XXX (ふりがな)

所属・職名：XX大学XX学部 および教授/准教授/大学院生などの別

住所：〒xxx-xxxx XXXX.

電話番号：xxx-xxx-xxxx

ファックス番号：xxx-xxx-xxxx

電子メールアドレス：xxxxx@xxxx

★ 通常郵便での応募について

電子メールでの応募の場合と同じ要領で原稿を作成してください(特に、上記(ウ)(ク)を参照ください)。したがって、①「個人情報ファイル」と②「発表要旨ファイル」の2種類の書類を用意していただきます。

電子メールでの応募と特に異なる部分は以下のとおりです：

(ア)用紙はA4を用いる。

(イ) 発表要旨には氏名を書かない。

(ウ)封筒の表に、「研究発表応募」, 「ワークショップ発表応募」もしくは、「ポスター発表応募」と朱書する。

★ 応募条件

発表応募者は会員に限ります。応募者が会員でない場合、必ず応募と同時に入会の手続きをしてください。入会方法は、<http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj4/> を参照。

★ 応募者への通知

応募書類を受理後、(できるだけ)1週間以内に受理確認のお知らせをメール(もしくは葉書)にて発送します。連絡なき場合は、問合せ下さい。

選考および研究発表の割り振りは運営委員会が行い、結果は応募1ヶ月以内に応募者に通知します。

今回も、第11回大会に引き続き、日本語での

- b. 原稿の1ページ目には、タイトル、氏名、所属(E-mail アドレスは任意)を記し、そのあと2行開けて要旨、本文を続ける。
- c. 「はじめに」または「序論」の節は0. からではなく、1. から始めること。
- d. 例文の前後は1行、各節の前は1行開ける。
- e. 注を付ける場合は、巻末とし、本文と参考文献の間にまとめて入れる。
- f. 参考文献のフォーマットは『語用論研究』の執筆要領に従うこと(本学会のホームページ参照)。

見分けのイメージ (1 ページ目)

<p>タイトル</p> <p style="text-align: right;">氏名</p> <p style="text-align: right;">所属</p> <p><Abstract></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>.....</p> <p>.....</p> </div> <p>【キーワード】:1、 2、 3、</p> <p style="text-align: center;">本 文</p>

3. 要旨 :

- a. 要旨は (日本語での論文も含め) 全て英語によるものとし、約100語で書く。

- b. 要旨は<Abstract>とページの左上に記し、原稿の1ページ目には、タイトル・氏名・所属と要旨を記すこと。

4. キーワード

- a. 要旨の下に【キーワード】: 或いは【Keywords】:と明記して、日本語の論文は日本語で、英語の論文は英語で、5個以内を添えること。

- b. キーワードと本文との間は2行アケとすること

2. その他の注意事項

- a. 執筆者は、前年度の大会の「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」での報告者に限る。
- b. 内容は、大会発表に沿ったものとする(但し、必要な修正を施すこと)。
- c. 使用言語は原則として日本語または英語とする。
- d. 『プロシーディングズ』に掲載した内容は、さらに発展させて、『語用論研究』に投稿することができる。その場合は、必ず十分な加筆・修正を施すこと。
- e. 別のカバーシート用紙(A4)に次の事項を記入して提出すること :
 - ①「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」のいずれであるか。
 - ②発表論文タイトルと発表者名(日本語) 氏名(ふりがな)
 - ③発表論文タイトルの英語訳と発表者名のローマ字表記。
 - ④連絡先 : E-mail アドレス

- 3. 原稿提出の締め切り : 2009年8月20日(時間厳守)

4. 原稿の提出方法：論文の原稿は、カバーシートと合わせて、電子メールで、ワードによるファイルと PDF によるファイルの両方を添付で送付する。

5. 送付先： psj.proceedings@gmail.com
(長友俊一郎 宛)

(『大会発表論文集』編集担当：余 維・
田代直也・長友俊一郎)

★ Announcement to Presenters at the 11th Annual Conference

(Additional information on the deadline, method & address of submission)

Request of submitting the manuscripts for the proceeding of the 11th Annual Conference of the Pragmatics Society of Japan(PSJ)
(VoL.4)

[For participants who presented papers in English]

Since 2005, the Pragmatics Society of Japan has been publishing presentations given at its Annual Conference for publication in a volume of proceedings. The following are instructions for use in preparation of manuscripts by those who have presented their work at the Conference as lecture presentations, in workshop, or in poster sessions.

Instructions for Preparing Manuscripts

1. Writing requirements

1. *Paper and length*

All manuscripts should be submitted on A4 size paper. Manuscripts for lecture presentations should be no more than 8 pages in length. Workshop and poster presentation should be no longer than 4 pages. Please note that these length restrictions include the abstract and the reference list. There is no restriction on the number of words or characters per page.

2. *Format.*

a. Margins: top and bottom, 3 cm; right and left, 2.5 cm. Number of lines per page, number of characters per line, and line spacing are not restricted (however, extremely small characters should not be used).

b. The first page of the manuscript should begin with the title, the author's name, and the author's affiliation (e-mail address optional), followed, after two blank lines, by the abstract and the main text.

c. The introductory section or prefatory remarks should be numbered 1, not 0.

d. Examples should be preceded and followed by one blank line. Each new section should be preceded by one blank line.

e. If notes are included, they should be placed at the end, between the main text and the reference list.

f. References should follow the style sheet of *Goyoron Kenkyu (Studies in Pragmatics)* (see the homepage of PSJ <http://www.soc.nii.ac.jp/psj4/>)

3. *Abstracts*

a. All abstracts should be written in English and should be about 100 words in length.

b. The abstract should appear on the first page of the manuscript, after the title, author's name, and author's affiliation. The abstract should begin with the word 'abstract' in the upper left corner. A maximum of 5 key words should be given below the abstract, preceded by '【Keywords】'. [Refer to the figure below.] Main text should be preceded by two blank lines.

<p>Title</p> <p>Author's name</p> <p>Author's affiliation</p> <p><Abstract></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>.....</p> <p>.....</p> </div> <p>【Keywords】: 1、 2、 3、</p> <p>Main Text</p>

2. Other important points.

- a. All contributors must have given a lecture presentation, a workshop presentation, or a poster presentation at PSJ's 10th Annual Conference of the Society.
- b. Aside from necessary corrections, manuscript contents should be faithful to the content of the presentation actually given at the Annual Meeting.
- c. As a general rule, manuscripts should be written in either Japanese or English.
- d. Extended versions of papers which have appeared in the *Proceedings* may be submitted for review to PSJ's Journal *Goyron Kenkyu* (*Studies in Pragmatics*). In that case additions and corrections should be made to the original manuscript.
- e. On a separate (A4) coversheet, please indicate the following information:

- i. Whether your presentation was a lecture, a workshop presentation, or a poster presentation.
- ii. The title of your paper and your name.
- iii. Your e-mail address.

3. Deadline of the manuscripts

The manuscripts must be received by August 20th, 2009 (late submission is not accepted).

4. Method of submission

The manuscripts, together with the coversheet, must be sent electronically, as attachment files in both MS Word format and PDF format. Use (the principal author's) name as a filename.

5. Address to which manuscripts should be sent:

psj.proceedings@gmail.com (Mr. Yuichiro Nagatomo)

(Editorial committee of the Proceedings: Wei Yu, Naoya Tashiro, Yuichiro Nagatomo)

★『語用論研究』への投稿の募集

1. 原稿提出の締め切りが3月31日に変更になりました。
2. 次号(第12号)からは、従来通り、日本語と英語の何れかによる応募となります。英語原稿については、以下の Style Sheet for English for English Submissions to *Studies in Pragmatics* ご覧ください。(なお『語用論研究』は10号から開拓社より12月中旬に発売されることになりました。市販化に伴い、非会員にも一冊3800円で販売します。バックナンバーについても、開拓社との話し合いで一冊3800円で販売することになりました。)

★『語用論研究』投稿規定

(以下の情報は、本学会のホームページ <<http://www.soc.nii.ac.jp/psj4/>>でもご覧いただけます。)

1. 投稿は会員に限るものとする。(会員でない場合は、応募と同時に入会手続きをと

ること)

2. 投稿論文は未発表の論文であること。ただし、すでに口頭で発表したものなどに相応の修正・加筆を加えたものは、審査の対象になる。同じ年度の日本語用論学会大会で発表が予定されているものは、発表前の投稿を認めない。また、応募の際は、本人と分かるような書き方は避ける。
3. 使用言語は原則として日本語または英語とする。
4. 投稿は1年中受け付けるが、当該年度の号の最終投稿締め切りは、毎年3月31日とする。
5. 採否決定の通知を9月末日頃とする。
6. 枚数、書式など。
 - a. 原稿枚数：A4、横書き、15枚以内（注、参照文献を含む）。
 - b. 書式：1ページ、日本語の場合は32行38文字とする。英語の場合は1ページ、1行70ストローク、1ページ32行とし、フォントの大きさを小さくして大量のストローク数になることは避ける。注や参照文献の活字を小さくしない。ただし、図表の挿入は可能。
 - c. 原稿の1ページ目はタイトルのあと1行アケで氏名、そのあと2行アケでアブストラクト（英語で、1行70ストローク、8行以内）、さらに2行アケでキーワード、そのあと2行アケで本文を続ける。ただし、採否決定前の投稿論文そのものには氏名、謝辞を書かない（掲載決定後に編集委員会より指示する）。
 - d. 例文の前後は1行アケル。
 - e. 各節の前は1行アケル。
 - f. 注は、1, 2, 3のように、括弧を用いない数字だけとする。
 - g. 見出しのサブセクション番号は、1. 1.のように、数字の後にピリオドを置く。
 - h. セクションの「はじめに」または「序論」は、1. ではじめる。
7. 注は参照文献の前にまとめて付ける。
8. 参照文献（参考文献、引用文献という言い方はしない）の書式は以下の例にならう。

Grice, H. P. 1989. *Studies in the Way*

of Words. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Hooper, P. J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givon ed. *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.

Horn, L. R. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61: 1, 121-174.

小泉 保. 1990. 『言外の言語学—日本語用論—』東京：三省堂。

無藤 隆. 1983. 「言語とコミュニケーション」、坂本昂（編）『思考・知能・言語』（現代基礎心理学）、第7巻、161-189、東京：東京大学出版会。

野崎昭弘. 1995. 「言葉と言葉の間」、『言語』、24: 2 (2月号)、62-69。

9. 参考文献に関する注意事項

- a. 参照文献は本文中で引用したもののみとする。
 - b. 英語の文献、日本語の文献を混在させて、アルファベット順に並べること（別々に分けない）。
 - c. 共著者の場合、英文は&を使わずand、日本語は・（なかぐろ）とする。
 - d. 雑誌については日本語、英語とも、巻数、号数、ページ数を明記する。
 - e. 英語の文献名で、語頭については、内容語は大文字、機能語は小文字とする。第1語の語頭のみ大文字で、あとは小文字という形式はとらない（上記8の英語の参照文献の書式参照）。
 - f. 採否決定前の投稿論文に投稿者本人の著作を多数挙げて、本人と分かるような書き方をしない。
10. 提出部数：原稿は6部提出する。（コピーで可）
11. 抜き刷りを希望する場合、費用は執筆者の負担とする。
12. 執筆者校正は初校のみとする。
13. 「原稿ファイル」とは別に、氏名（ふりがな）、郵便番号、住所、所属、職名、連絡先電話番号、FAX番号、e-mailアドレス

を記載した「個人情報ファイルを作成する。この二つのファイル共、ワード及びPDFの両方で作成する。

14. 送付方法と送付先：

「原稿ファイル」及び「個人情報ファイル」を下記宛て送付する。送付は、1) ファイルを添付した電子メールか2) ファイルを保存したフロッピーディスク等の（書留）郵送のいずれかとする。

送付先：

（電子メールによる場合）

psj-sip@andrew.ac.jp（『語用論研究』編集委員長 林宅男）

（原稿送付の際は、確実に受信できるように、出来るだけ無料メールアドレスのご使用はお控え下さい。）

注意：電子メールによる送付の場合、送信後、2週間経っても、原稿を受理した旨の確認返信メールが無い時には、必ず、こちらからの確認返信メールがあるまで再送してください。

（郵送による場合）（「投稿論文在中」と封筒の表に朱書きのこと）

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野1-1
桃山学院大学 林宅男

TEL (0275) 54-3131 Fax (0275) 54-3202

15. 掲載決定後に、最終原稿を3部上記の宛先に郵送し、同時に最終原稿の添付ファイルを、上記のメールアドレスに送付する。提出原稿は原則として返却しない。

★Call for papers for *Studies in Pragmatics*
(Please note that the deadline of manuscript submission has been changed to March 31st).

★The Style Sheet of English Papers for *Studies in Pragmatics*

1. Manuscripts

- This journal only accept contributions from members of the Society. Non-members may apply for membership by contracting the business office, psj.secretary@gmail.com..
- Papers submitted to *Studies in Pragmatics* must not have been published previously nor should they be under consideration for publication elsewhere. Authors may submit only one manuscript at a time for consideration.

Papers that will be presented at the annual convention may not be submitted.

- Manuscripts must be written in such a manner that the authors cannot be identified. Authors name and contact information should appear on a cover sheet separate from the rest of the manuscript.
- All manuscripts should be submitted on A4 size paper.
- Manuscripts for papers should be no more than 20 pages in length, excluding references and footnotes.
- Type in 12-point font, 32 lines on a page.
- Leave margins of 2.5 cm (1 inch) on the right and left, and 3 cm on the top and bottom.
- For authors whose native language is not English, it is advisable that, prior to submission, manuscripts be corrected and edited by a qualified native speaker of English.
- Authors are responsible for the first proofreading only. Corrections should be limited to typographical errors.
- Authors may purchase offprints of their articles.
- On a separate coversheet, please indicate the title of the paper, author's name, email address, affiliation & position, and postal address. Authors are requested to submit the manuscript file and the coversheet file in both WORD format and PDF format by e-mail or by regular mail.
- If submitting by regular mail, save the manuscript file and coversheet file on a floppy disk or other storage medium and send by a registered mail.
- Address where the manuscripts should be sent:

<e-mail>:psj-sip@andrew.ac.jp

(Dr. Takuo Hayashi, chief editor for *Studies in Pragmatics*)

Please refrain from sending manuscript files using a free mail address, so that they should be received without problem.

If after submitting a manuscript by e-mail, you do not receive confirmation of receipt of your manuscript within two weeks, please send an e-mail message, requesting such confirmation, to takuo@kcc.zaq.ne.jp.

<Regular mail>:Dr. Takuo Hayashi

(chief editor for *Studies in Pragmatics*)
 Momoyamagakuin University (St. Andrew's
 University)
 1-1, Manabino, Izumi city, Osaka, 594-1198,
 JAPAN

n. Submission deadline: Submissions are welcome at any time, but manuscripts for a given year's issue must be received by March 31st of that year. Submissions received after that date will be considered for the following year's issue. Submitted papers are refereed and authors are notified of the results around the end of September.

2. General Format

Abstracts:

- a. Abstracts should be not more than 8 lines (about 100 words) in length.
- b. The abstract should appear on the first page of the manuscript, after the title, author's name, and author's affiliation. The abstract itself should be preceded and followed by two blank lines and should begin with the word 'Abstract' in the upper left corner. A maximum of 5 keywords should be given below the abstract, preceded by 'Keywords'.

The Main Text of the Paper:

- a. The introductory section or prefatory remarks should be numbered from 1, not 0. Subsection numbers should be followed by a period (e.g., 1.1.).
- b. Examples should be preceded and followed by one blank line. Each new section should be preceded by one blank line.

Notes:

If notes are included, they should be placed at the end, between the main text and the reference list. Notes should be indicated with Arabic numerals (1, 2, 3, 4) without parentheses.

References:

- a. References should be typed at the end of the paper.
- b. Cite only works quoted or referred to.
- c. The titles of books and articles originally written in Japanese should be transcribed in Roman letters and supplemented by English

translations in brackets.

d. The format for references (including order of elements and punctuation) should be consistent with the following examples:

Grice, H. P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Hooper, P. J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givon ed. *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.

Horn, L. R. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61:1, 121-174.

Koizumi, T. 1990. *Gengai no Gengogaku: Nihongogoyoron* (Linguistics of Implied Meaning: Japanese Pragmatics) Tokyo: Sanseido.

《事業委員会からのお知らせと報告》

3月に予定していました今年度の談話会は、講師の高司正夫先生の体調不良により、中止になりました。少し先のことになりますが、来年度は副会長の久保進先生をお招きする予定です。詳細は秋のニューズレターでお知らせしますので、皆様のご参加をお待ちしております。

メーリングリスト等でお知らせしましたように、6月13日(土)に日本機能言語学会 (Japan Association of Systemic Functional Linguistics)との共催で、Dr. Peter White (アデレード大学)によるAppraisal Theory (「評価理論」)のセミナーを開催しました。参加者は70名近くあり、盛会でした。ご参加いただいた皆様、ご協力ありがとうございました。

この理論は、M.A.K. Hallidayの「選択体系機能言語学」(SFL)の枠組みの「对人的メタ機能」を発展させ、特に、人の感情、スタンス、信念、価値観、などの心的態度が、発話やテキストにどのように表象されるかを、記述と説明というアプローチによって明らかにすることを目指しています。分析の方法は機能主義にもとづいていますが、理論とアプローチは語用論、談話分析、そして批判談話分析と深く関係しています。

またこの理論は、コーパス分析への応用も視野に入れています。今回のセミナーは、理論の説明、分析の方法、データ分析の3部から構成されており、最後のデータ分析では参加者全員がニューステキストの分析に取り組みました。

昨年度で2年間の活動期間が終了しました二つの研究会 (SIG)、「モダリティ研究会」と「話し言葉の分析研究会」から、研究継続の申し込みがあり、6月14日の運営委員会で審議の結果、承認されました。一期同様、二期目も大会のワークショップなどで研究の成果をご発表いただきますようお願いいたします。

新規研究会の申し込みは常時受け付けておりますので、rhayashi@konan-wu.ac.jpまでお申し込みください。

(事業委員会)

★ 2009年大会招聘講師紹介

Laurence R. Horn 博士

ホーン博士は、現在 Yale 大学言語学科教授として、新グライス学派と呼ばれる語用論の旗頭的な役割を勤め、アメリカ言語学会ではなくてはならない存在である。1945年7月、New York 市生まれで現在 63 歳。1972年、UCLA の Barbara Partee の下で、*On the Semantic Properties of Logical Operators in English* (英語における論理演算子の意味論的特性について) という博士論文を書き、一躍著名な言語学者の仲間入りをしている。現在まで、その著書、論文の数は膨大で、主な関心事は、論理学、語彙の意味論、新グライス学派語用論の結合を目指すとしている。特に、アリストテレス派論理学から現代に至るまでの、論理学、哲学の造詣が深く、また、言語学者としては、グライスを受け継ぎ日常言語の運用や実例にまで、目が行き届いた研究をされている。氏のホームページには、John Stuart Mill (1806-73; 英国の経済学者・哲学者・政治理論家; 下院議員) の *The structure of every sentence is a lesson in logic.* ということが貼り付けられているくらいである。代表的な著書に、*A Natural History of*

Negation (1989) (MIT Press) があり、自然言語の否定とそれに関する論理演算子の研究に主導的な役割を果たしている。現在、語用論の分野で盛んな話題 (例えば、埋め込まれた推意の問題) など、ほとんどすべての問題の端緒となった話題を提供し、研究を進めているのも Horn 博士と言っても過言ではないと思われる。氏は、2001年に来日され、上智大学でのシンポジウムや連続講義、大阪大学、奈良女子大学、関西外国語大学などでの連続講演などを通して、わが国の語用論、言語学にも大きな影響を与えている。氏のホームページによると、最近でも2007年中に以下の3つの論文を書かれており、精力的な研究が見て取れるところである。

2007 Lexical pragmatics and the geometry of opposition: The mystery of *nall and *nand revisited. To appear in Jean-Yves Béziau (ed.) *Proc. First World Congress on the Square of Opposition.*

2007 Issues in the Investigation of Implicature. To appear in *a volume in honor of Grice* edited by Klaus Petrus.

2007 Toward a Fregean pragmatics: Voraussetzung, Nebengedanke, Andeutung. In I. Kecskes & L. Horn (eds.) *Explorations in Pragmatics: Linguistic, Cognitive, and Intercultural Aspects.* Mouton. 39-69

人柄も温厚、話し好きで、常に言語のことを考えられ、どういう質問にでも応じていただけるといった方で、今回、日本語用論学会として、大会の招待講演の柱に、氏をお呼びすることができるのは、学会関係者一同、最大の喜びとするものである。

(文責: 田中廣明)

Hartmut Haberland 博士

ハーバーランド博士は 1948 年ドイツ、ハノーバー生まれで、1971年にベルリン自由大学で M.A. in Linguistics を取得され 1977年に Jacob L. Mey とともに *Journal of Pragmatics* を創設され、現代語用論研究の創始者の一人です。社会言語学から人とコ

ンピュータとの対話まで研究対象も多彩で、英語、ドイツ語、デンマーク語による業績が多数あります。現在、デンマークの University of Roskilde で教えておられます。日本語用論学会では第 9 回大会特別講演の講師に予定していましたが、ご病気のため来日できなかつたので、この度第 12 回大会に再び、特別講演をお願いすることになりました。

業績の一部を以下に挙げてみます。

- 1991 『社会言語学：言語は社会の不平等を克服するか』[co-authors: Frithjof Hager and Rainer Paris, translated by Otomasa Jun, commentary and introduction by Inoue Junichi] 大阪外国語大学学術研究双書, 3.
- 2000 Interview with Harmut Haberland. *Pragmatic Matters*, JALT [Japan Association for Language Teaching] Pragmatics SIG Newsletter 2(1):3-5. <http://www.pragmsig.org/files/PM4complete.pdf>.
- 2002 Linguistics and pragmatics, 25 years after [with Jacob L. Mey]. *Journal of Pragmatics* 34(12):1671-1682.
- 2008 Two pilot studies of multilingual competence in international programmes at Roskilde University [with Karen Risager]. In Harmut Haverland, Janus Mortensen, Anne Fabricius, Bent Preisner, Karen Risager and Suanne Kjarbeck (eds.) *Higher Education in the Global Village: Cultural and Linguistic Practices in the International University*, Roskilde: Roskilde University. 41-65.

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

★ 編集後記

会員の皆様、お変わりございませんか。今回のニューズレターは、3 月の運営委員会を 6 月の運営委員会と合併して行われ、それに基づいていますので、例年より 2 月ほど遅れてお送りしております。また今回のニューズレターには、12 回大会応募要領、それに『大会発表論文集』と『語用論研究』の応募・執筆要領を日本語用、英文用のい

ずれについても掲載しました。HP だけでなく、こうしてお知らせしますのは、一人でも多くの方にご応募いただきたいという運営委員会一同の強い思いによるものです。ぜひご応募ください。そのスペースの分、「日本語用論学会 10 年の歩み」と新刊書紹介スペースが、次号送りになってしまいました。

さて、招待講演ですが、去年は D.Wilson、今年に L.Horn、H.Haberland と、豪華な顔ぶれです。このような大先生については、みなさんきっと何かしら思い出をお持ちのはず。D.Wilson については、1986 年の CLS22 大会のパラセッション「語用論と文法理論」での Wilson の講演「語用論とモジュール性」で、教室の一番後ろの席から、G.Lakoff があまりにも辛らつなことをいうので Wilson が思わず発した「ジョージ」という哀願するような声。そして評者 J.Sadock の「会話の原則は 4 つでは多すぎるが、1 つでは少なすぎる」という評。それでもこの理論は立派にやっています。

Horn の思い出は、なんとといっても 1984 年の「Q 含意と R 含意」の論文です。先の Sadock の評はこのことが頭にあったのでしょう。この論文は、Horn の魅力満載の論文で、語用論論文の傑作だと思いました。柴谷先生にある時 Horn のことを話したら、deep thinker という評が即座にかえってきました。今年の Horn の講演のタイトルは、「含意再訪：新グライス学派語用論の課題と展望」とうかがっています。今度は含意のどんなことを語ってくれるのでしょうか。若い語用論学者の方々にも、温故知新、きっと新たな刺激を与えてくれることでしょう。

アメリカ留学中、「メタ言語否定と語用論的多義性」を読み、Horn に会いに Yale まで行ったこともあります。11 ページ紹介文にあるように温厚で家族思いの方でした。唯一残っているアカデミックな言説は、「外部否定とメタ言語否定とが entailment 関係にあるかどうかは open question だ」ということ。

(ニューズレター編集、中村芳久)